

スマートフォンの普及がもたらす大学生の学力の影響

0 はじめに

本論文は学生のスマートフォン¹⁾使用が授業内容理解にポジティブな影響をあたえていることを主張する。最初に大学生のスマートフォン使用に関する従来議論を振り返り、その議論の限界を提示する(第一章)。次に教員に対するインタビューの内容を紹介し、スマートフォン使用に対してネガティブな影響が懸念されていることを示す(第二章)。一方学生のスマートフォン使用に関するアンケート調査結果によりスマートフォン使用の持つポジティブな影響が出ていることを示す。(第三章)。教員の認識と学生の実態の乖離を理解するデータを提示する(第四章)。最後に学生の授業中におけるスマートフォン使用の意義を再評価し、大学授業におけるスマートフォンの位置づけを見直す(第五章)。

1 問題提起

本論文の主張はスマートフォンの長時間使用は学力達成にネガティブな影響を及ぼすわけではないということである。

大学生のスマートフォン依存問題に関してはこれまでも多数の言及がなされている。たとえば2017年5月28日には産売新聞が3面にわたる特集記事を掲載し、大学生のスマートフォンの使用の弊害を訴えた。それを皮切りに新聞や週刊誌でこの問題が多数取り上げられるようになってきている¹⁾。こうした議論を受けて、学術的にも様々な議論がなされてきた。情報倫理学会では(省略)。また社会学においても(省略)。こうした議論の多くはスマートフォン使用のマイナス面を強調し、大学内でのスマートフォン使用の制限を求める世論を形成してきた。しかしその際、特定の事例を取り上げ、問題の大きさが主張されることが多く、平均的な学生のスマートフォン使用の実態が反映されていたとは言いがたい。そこで本論文ではよりマクロな視点から大学生のスマートフォン使用の実態を明らかにすべく、アンケート調査を実施することとした。これにより極端な事例ではなく、より一般的・平均的な学生の状況が明らかになるはずである。

社会学において大学生のスマートフォン使用の問題を最初に取り上げたのは×野◎三である。×野は「(省略)」(2009,p.321)と述べ、スマートフォンは大学生にとって有害でしかないと主張した。同じ趣旨の議論としては(省略)。その一方で(省略)というアプローチも試みられた。例えば△山太郎は(省略)。

ここで紹介してきた議論はいずれもミクロな視点からの事例紹介をもとにした議論である。それは確かにスマートフォンの持つ危険性の一側面を明らかにした。しかしその危険性がどの程度の広がりを持つのか、大学生全般にどのように当てはまるのかについてはいまだ不確かなままなのである。これまでの議論の中で欠落しているのはそうした大学生一般の状況を把握するためのマクロな視点からの調査であり、本論文はそれを試みる。

本論文では〇〇大学在学学生に対してスマートフォン使用に関するアンケート調査を実施した。2018年の「〇〇大学学生名簿」1/4の学生を無作為抽出した。該当者は専用のウェブページで回答した。その際学生番号とパスワードでのチェックを行い、重複回答などが起こらないようにしている。調査票の内容は付録のとおりであり、

1日あたりのスマートフォン使用時間

回答当時のGPA

講義時間中スマートフォンをどの程度使用するか

を中心に質問している。

本論文ではさらに授業担当者に対して、講義中にスマートフォンがどの程度使用されていると認識しているか、そして講義中のスマートフォン使用と講義内容理解との関連についてどう考えているのか、についてインタビュー調査を実施した。これによりスマートフォンの使用が大学内においてどのような位置づけを持っているのかを教員側・学生側双方の認識のズレを明らかにする。

2 授業中のスマホいじり-教員インタビューより

主張Aの内容: 授業中のスマホ利用は講義内容理解の妨げとなる

授業担当者インタビュー

「授業中にスマホを弄っていて講義を聴かない」

3 スマホいじりは学力に悪影響を及ぼすか-学生に対するアンケート調査より

主張Bの内容: 授業中にスマホを使用する学生は好成绩を得る

スマホ使用と単位取得に関するアンケート

スマホ使用時間(SNS使用時間)とGPAに相関なし

授業中スマホの使用頻度とGPAに正の相関(使用頻度が高いほど好成绩)

4 授業中のスマホ活用-アンケート調査の自由記述より

主張 C の内容: 授業中にスマホを使用するのは授業に参加するためである

授業中のスマホ使用内容についての自由記述

「授業中に分からない用語があればスマホで調べる。分からない用語をそのままにしておくより授業内容が理解できる」

5 教員と学生の意識のズレ

結論の内容: 教員の認識を超えて学生は授業にスマホを有効活用している

「主張 A」と「主張 B」の対立は「主張 C」により解決される。主張 A における授業担当者の「理解」は学生の行為を正しく見られてはいなかった。

6 おわりに

本論文では、学生のスマートフォン使用と学力達成について、教員側の主観からではなく、量的な調査にもとづいた実態を明らかにした。授業中にスマートフォンを使用するのは、ただ授業を聞かず私的な目的で使用するだけでなく、むしろ授業内容をよりよく理解するために用いられることが多くある。その結果として授業中にスマートフォンを使用する頻度・時間が一定長ければ、授業内容理解にもプラスの相関があることを示した。

大学内におけるスマートフォン使用を制限しようとする主張に対して、本論文の結果が示唆するのはそうした施策は逆効果になるのではないかという懸念である。むしろ授業内で教員も学生のスマートフォン利用を積極的に行わせるような方策を考え、取り入れるべきではないか。

しかし本論文では〇〇大学文系学部学生に対する調査を行っただけであり、いわゆる(学力水準における)「ランク」が異なれば、講義の進め方や、授業中のスマートフォン使用のあり方も別なものとなるかも知れない。

こうした他大学との比較については今後の課題としたい。

注

1) 小型 PC の機能を併せ持った高機能携帯電話。

参考文献

Ahi, Takahashi, 1997, Mladí lidé používají informační zařízení, Praha: Univerzita Karlova v Praze. (=2004, 生田樹々訳『若年層の情報機器活用術』朝椿大学出版会.)

×野◎三,2009,『スマートフォンの社会学』▲■出版.

△山太郎,2011,「大学生にスマートフォンを持たせてはいけない」『情報社会学』103(2),24-32.

高橋なつみ,2015a,『社会統計学』日本統計出版.

———, 2015b, 「分散分析における Welch 法使用の意義」『統計学研究』21(2),103-110.